

2012 4/24

No.1921

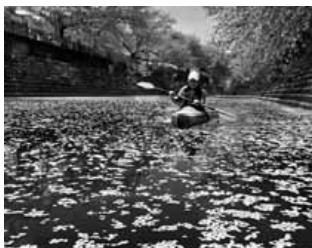
毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



花びらの絵模様。一。横浜の市中心部を流れる大岡川で15日、川岸の桜(ソメイヨシノ)が見納めとなり、散りゆく花びらが川面を染めた。大岡川は下流の中区から中流の南区にかけての両岸に約800本のソメイヨシノが咲き誇る。「最後の見せ場」を訪れた人たちは思い思いに楽しんでた。



contents

視点・点描	3
「エゴ乗せずペダルこごう」	
講演録	4
「松下幸之助と松下政経塾」	
松下政経塾理事長兼塾長 佐野 尚見	
国際	8
インド西部に製造拠点続々 州首相の指導力強く影響	
経済	10
際立つ円滑化法利用後倒産 進まぬ中小企業の抜本再生	
くらし2012	12
眠っている通帳ありませんか？	
広告珍談	14
～福沢諭吉のおしえ② 乗客は作ろう！	
政治反射鏡	15
主導力なき野田、谷垣両氏 あいまいな山口公明党	

事務局だより

◇横浜定例講演会・総会

2012年5月14日（月）

崎陽軒・本店

・講演会

13時30～15時

講師は政治評論家の森田実氏

演題は「政局の展望」

・総会

15時15分～16時

視点 点描



エゴ乗せずへダルムズン

薫風をほおに感じながら、ペダルをこぐあのすがすがしさ。自転車が似合う季節の到来である。

冬の間は中断していた自転車通勤・通学を、ポカポカ陽気に促されて再開したという方も多いのではないか。入学や入社といった新生活のスタートを契機に、「気軽な足」として買い求めた社会人、学生もいるはずだ。

自転車の利用は、健康の維持や

省エネの実践にもつながる。だから、大いに奨励したいところだ。だが、世の中には、自転車と聞いただけで、身をすくめる人たちもいる。

猛スピードで歩行者の間を通り抜けたら、イヤホンで音楽を聴きながらの「ながら運転」の横行など、マナー無視の危険な運転がここところ、目に余るからである。

記者自身も先日、通勤途中のバス停で肝を冷やす体験をした。制

服姿だったから、女子中学生か女子高校生だろうか。彼女の運転する自転車がバス停とバス待ちの人の列の間を、かなりのスピードで通過したのである。バス停とバス待ち列との間は、70^{km/h}程度だったと思う。あの時、列の中の誰か一人でもバス停側に踏み出していたら大事故につながりかねなかった。今でも、ほおをなでた一陣の風の正体が、音もなく猛スピードで近づいてきた自転車だと知った時の、ぞつとする恐怖感が体に染みみついている。

人のそばを通る際はベルを鳴らして注意を促した上で徐行する。私たちの世代では当たり前だったマナーはどうやら、若い世代には受け継がれていないようだ。さらにやっかいなのは、周囲を身震いさせた「春風」を起こした張本人に、その自覚がほとんどな

いことだ。くだんの女子学生が何事もなかったかのように走り去ったのも、この無自覚のなせる業だ。自分の乗っている乗り物が道路交通法上は「軽車両」と位置付けられ同法の規制を受けることや、無謀な運転をした場合は人の命さえ奪いかねないという重い事実、徹底した安全教育を通してしか身に染みまい。県警によると、昨年1年間に起きた自転車事故は9434件で、事故全体の24・3%を占める。ちなみに2002年は19・9%だったからその割合は増えており、要注意である。

神奈川新聞の柳壇に昨春秋、掲載された句がある。(チャリコンはエコとエゴとがせめぎ合い)。さわやかな自転車に「エゴ」は似合わない。心に留めたい一句である。

(神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也)

乗客は作ろう！

阪急電鉄。いまでこそ日本有数の私鉄だが、草創期はとんでもない田舎鉄道であった。

創業者小林一三は1873（明治6）年、山梨県韮崎の生まれ。

慶応義塾に在学中、小説を書いて山梨日日新聞に連載。卒業して作家を志し、都新聞（東京新聞の前身）へと願ったがダメ。三井銀行本店に入った。大阪に転勤、支店長は高橋義雄。のちに三井呉服店を三越百貨店に改革するその人にあこがれ、三越へ転籍希望したがダメ。1907年、銀行を退職。まだ開通していない、有馬箕面電気軌道の専務（社長は空席）になった。

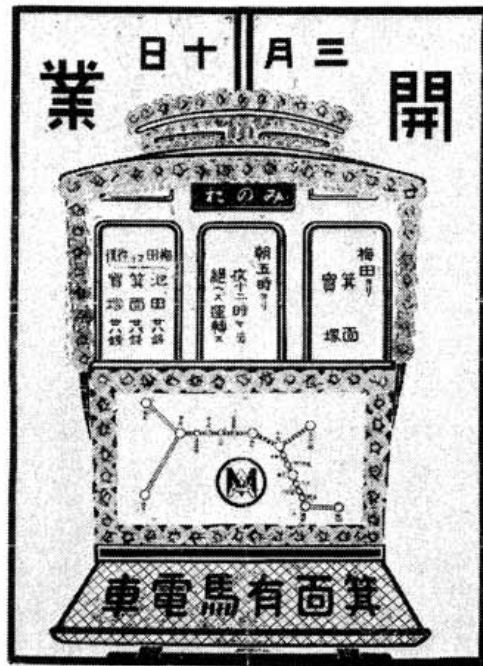
大阪から有馬温泉とモミジの名所、みのおを結ぶ鉄道。その間はレンコンのドロドロ畑と、田んぼだけ。乗ってくれそうな人は住ん

でいない区間を走らせようとする計画。開通は3年後、小林は考えた。乗ってくれる人がいないなら、乗ってくれる人を作ればいい！

沿線を住宅地にして、大阪から人を移住させれば解決するではないかと。

09年、住宅地開発のため池田に30万坪を買収。『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか』というタイトルのパンフレットを制作した。その文章がすごい。

《美しき水の都は昔の夢と消えて、空暗き煙の都に住む、不幸なる我が大阪市民諸君よ！》と呼び



かけ、《出産率十人に対し死亡率十一人強に当る、大阪市民の衛生状態に注意する諸君は、慄然として都会生活の心細きを感じ給ふべし》。さあ、逃げださない。《田園趣味に富める模範的郊外生活を懐ふの念や切なるべし》とあおつて、《郊外生活に伴ふ最初の条件は、交通機関の便利なるに在りと

す》と、小林は書いた。売出したのは池田市（もちろん、小林も移住した）室町の200区画、1区画100坪。5〜6部屋の2階建て、家屋とも2500円

から3000円。頭金は2割、残りは10年割賦。そのころ、銀行員の初任給は40円ほど。広告は大いにキキメあり、早々に完売した。

続いてみのお・豊中・宝塚・伊丹でも分譲した。東急電鉄を創業した五島慶太は教えを請い、田園調布をつくった。私鉄各社の不動産事業は、こうして始まったのである。さて、乗客はできた。10（明治

43）年3月10日、有馬箕面電気軌道は開通。大阪の各紙に全ページ広告をだした。「電車正面のこの広告が、阪神間の全新聞紙に載ったときの私の嬉しさ、アア、ガラアキ電車！ オールスチールカー、四輛連結、三十分で突走しているあの日本一の電車の前身である、たった一輛のガラアキ電車！」と小林はなつかしむ。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
有馬箕面電気軌道開通の新聞全ページ広告・1910（明治43）年3月